

自尊心を育む「ごかんたいそう」の取組み

～保育・教育という課題～

まった かずや
全田 和也

NPO 法人ごかんたいそう代表理事

神奈川県逗子駅近隣に小高くそびえる披露山の麓山の一面に、自然を五感で感じることができる保育園として「ごかんのいえ」（定員19名 対象1-2歳児）と「ごかんのもり」（定員30名 対象3-5歳児）は作られた。その保育園などを2012年から運営するNPO法人「ごかんたいそう」（以下、ごかん）の全田和也氏に鳥がさえずる園庭にて話を伺った。（聞き手：青山竜文）

この保育園の特徴を雄弁に語るのは全田氏によるHP記載文章である。この引用から開始したい。

ごかんのもりは、子どもたちだけでなく、保護者や地域の方々、活動に共感してくれた仲間も一緒になって手作りした菜園が園舎を包み込むようにひろがっています。子どもたちは一年を通して、四季折々の野菜を育て、収穫したものを自分たちで料理し、美味しく頂いています。また、生ゴミと山の落ち葉をコンポストにいれて土を作り、収穫した種を保存して、また次の年に種まきから始める。そんな自然の流れと寄り添うようなくらしを積み重ねています。（「ごかんたいそう」HPより <http://gokantaiso.org/>）



写真1 保育園の園庭

（写真：日経研月報）

1. 多様性と自尊心

—今回の特集テーマは「社会課題に向き合う」というものです。「育児」「教育」には、さまざまな課題があると思います。とはいえ、実際に多くの人が悩むのは、大括りの「育児」「教育」ではなく、自身に直結する部分での悩みでしょう。この保育園づくり自体、どういった経緯で始まりましたか？

全田：そもそもの設立経緯はプライベートなものでした。きっかけは自分の育児で感じた厳しい体験が出发点です。乳幼児期、発育に遅れがあると言われた息子のために、療育やセラピー、発達専門の小児科などにも通い、幼稚園も何か所も変わりました。

その当時、自分もくつろげる場所が作れず、家族自体も世の中の空間・コミュニティ・関係性から孤立していく感覚に襲われ、「抱え込む」感じにもなりました。小児科の先生から「普通学級にはいけないかも」と言われたりすると、「普通学級にはいけないと普通じゃないのか？」という思いも頭をめぐります。そのあたりから「多様性」が一つのテーマになりました。

—実際に保育園を設立するというのは大きな飛躍ですよね？

全田：息子が幼稚園の年中時に家族で逗子の海に遊びにいったのですが、その際に今までみたことがないぐらいにのびのび遊ぶ息子の姿を見て、そのインパクトが心に残り、その後すぐ逗子に移りました。一方で、息子が小学校に上がった後、彼が自由作文の授業で表現した作品について、先生側から「意味がわかりません」というような厳しいコメントが述べられたのを見て、一種の危機感も感じました。

【全田和也氏のプロフィール】

1975年、兵庫県生まれ。1998年日本開発銀行（現・㈱日本政策投資銀行）入行。以降、リノベーションの企画運営などの職を経て、2012年、NPO法人「ごかんたいそう」を立ち上げ、現在は2つの保育園の運営などに携わる。愛称は「じゃがさん」。

そうした危機感を「何かを創る」という形で乗り越えたい、いろいろな子供が胸をはって生きていける場を作りたい、と思ったのが直接的な動機になります。子供にライフワークを与えられた感じですか。一他の人からもそうしたものが求められていると感じましたか？

全田：先程述べてきたような過程で同じようなつらさを抱え込む人たちにも出会いました。また、実際に保育園設立後、見学にきてくれる人たちの相談には、「関係性での孤立」や「親が時間的に余裕がない」などの悩みも多くみられました。

また逗子は小さな街でコミュニティが強いエリアです。逗子に来てからできた友人は子育て世代が多く、日常的な会話をしていく中、自分の感覚に共感をしてくれる人も多くいました。そういう人たちが一緒に今の取組みを支えてくれています。

一仕事含め家族が抱える問題に「ごかん」はミートしていたということでしょうか？

全田：そういう面もたしかにあると思いますし、そうありたい、とも思います。「ごかん」の中心のテーマは「自尊心」です。自尊心がどう育まれるか、を長い時間をかけ、愚直に考えてきました。

そして、実際に「子供たちが自分からイマジネーションを広げる、自主性を育む」ためのトライをたくさんしてきましたが、結局、どんなメソッドを取ろうとも、子供に接する大人の自尊心が育っていなければ、子供の自尊心を育むことは難しい、と今は感じています。そして、それは今の社会の課題でもあるでしょう。

2. モデルケースを作る

一2012年からですから、ここから育った子供も増えてきたと思います。その成長をどう見えていますか？

全田：地元でもビーチクリーン（海岸でのごみ拾い）や栽培した苗の販売などさまざまな取組みを

行っており、そこに来てくれて、卒園後も仲良くする機会は多くあります。彼らの成長の機会をみるのは大きなやりがいです。一方、10年目になってくると、親から「小学校にはいってから輝きを失っている」と相談を受けるようなケースもあり、これは新たな課題です。

一実際、小学校や中学校に上がると環境は変わっていきますよね。

全田：そこはもやもやとする部分です。学童や小学校を作ってほしい、とある時期から言われはじめたのですが、子供たちもいずれ社会に出ていかないといけないので、最初はピンと来ていませんでした。ここにしかない切り離されたコミュニティを作ることが目的ではないので。

子供たちはいずれ社会と「個として向き合う」必要があります。ただ、そのタイミングにはばらつきがあるのも事実です。そのギャップを埋める意味では、一個人としては、小学校を作ること、そして大人が自尊心を取り戻す場を作ること、この二つが近時大きなテーマになりつつあります。

一足下での保育者や教育者との交流はどうですか？

全田：3-4年前からここで保育に関わっている人とのゼミを通年で始めています。集まるのは現役の保育者や学校の先生などです。静岡や横浜の公立の学校の先生なども入っています。ごかんのような場所をどう作るか、もしくは将来作りたい、などのテーマをもった方々20名くらいと対話を重ねるのですが、そのゼミに集まる先生方も悩まれています。

こうした場をたとえば学校の校庭に作りたい、でもそれを提案する勇気がもてない、という状況に対して、単に「やれるよ」という話でなく、どうステップを踏むか、が重要です。

一それぞれの学校環境で所与のものがあ、なかなか動けないケースが多いと想像します。

全田：その通りで、自分ができることは結局「モデ

ルケースを作ること」「小さなことからでも一歩踏み出すことを応援すること」と考えるようにしています。例えば今座っている場所の奥にあるかまどは子供たちとレンガから作ったものですが、こうしたものからお味噌汁を作る、とかなら自分の現場でもできるのではないかと、などということです。「ごかん」で行っていることというのは、自分達が思い描く場を実証研究している、という側面もあり、その共有は一つのアプローチになると思っています。



写真2 子供たちと作ったかまど
(写真：日経研月報)

また「ごかんのたね」というフリーペーパーや「genfukei」という冊子を作り、活動の中での気づきや給食のレシピなども伝えるようにしています。ゼミの方々に起業をされている人も出てきました。



写真3 フリーペーパー「ごかんのたね」
(写真：ごかんたいそう HP より)

3. 文化性と継続性の両立

— 安定的な事業運営も大きなテーマです。

全田：最初の3年間は認可外でしたので、非常に厳しい状況でした。3年後に認可を取り、その後にできたもう一つの園は今も認可外です。

事業という意味では、やはり認可が取れてからは安定しました。ただ絶対的な保育料は相場より抑えてきた一方で、この規模の園とすれば敷地もひろく、ガーデンティーチャーなどの専門職もおり、固定費は高くなります。「これからもっと追及したい」と思うのですが、追及をすれば支出も上がり、文化性と継続性の両立は永遠のテーマです。

— 解決策はありますか？

全田：解決のためというわけではないですが、実際に園舎や塀、それからそもそもの開墾などはワークショップなどを行い、共感を得た方たちにDIY的にかかわってもらっています。園庭も全部手作りで、保護者の方が、自主的にガレージセールから上がった売上げをベースに果樹を寄贈頂き、それが植樹され、今苗木から大きくなってきました。

一緒に関わってくれている人たちが、ここを自分の場所と思ってくれている、というのが大きな部分です。偶発的かもしれませんが、場のあり方としては凄く可能性を秘めていると思います。年間での寄付も多く、フリーペーパーにロゴを掲載することでの寄付や、年に2回、子供が作った野菜の苗をプラントセールというイベントで販売しているのですが、その苗の収益や出店料なども活動費にあてさせてもらっています。

— パブリックセクターの支援はどう考えますか？

全田：やはり認可をとれたことが大きいのですが、認可・認可外の両方を経験する中では、その間のギャップが大きく、時代にあわせた認可の仕組みのアップデートは必要かと思っています。保育園も以前は

量的補完が最大テーマでしたが、今後は質が重要です。認可が既得権益化してしまうことは望ましくはないと思います。切磋琢磨をしていくためにも、認可・認可外の距離を埋める方向は必要だと感じています。

一方で、先程のゼミの公立の学校の先生にせよ、対話を重ねた市役所の方にせよ、そういう方々との対話から、社会の中の自分たちの立ち位置やこれからの役割などについて気づきを頂けることも多く、閉鎖的な形で理想郷を追求しているという形にしないこと、は重要だと思います。



写真4 ごかんのもり
(写真：ごかんたいそう HP より)

4. 組織の変化と起業経験

—「ごかん」の組織は変化していますか？

全田：今は自分一人がオーナーシップや経営を担うわけではなく、共同体的組織に変化をしてくれています。最初は自分が抱えていたのですが、10年間やっていくうちに社員の人たちが自立してきました。今はまさに節目で、2021年の春以降、全面的に運営を任せる形に変えたのですが、皆が目に見えて伸びています。

立ち上げた経緯からも事業に対する思い入れが強

いので、いつしか自分と法人の人格が同一化してしまっていた感じもあったのですが、ごかんが自分から親離れをしてきた感じでした。この場で子供が育っていている様子は何物にも代えがたい大きな原動力なのですが、同時に、一緒に場を作る社員の人たちが自立していくことも生きる喜びになっています。

—これまでの取組みを自分でどう振り返りますか？

全田：以前、自分は起業をすることなどを「リングに上がる」という言葉になぞらえていました。ただ、それは「わかってなかった」とも感じます。大事なものは、誰かからの評価を気にするのではなく、自分が主体的に生きられているかどうか、ということでした。当時の自分ともし話をするのであれば「リングに上がりたかったら、同じ職場で今からでもあがれるよ」と言いたい、というのは正直な気持ちです。実際、今、自分を生きられている感じはしていて、これからも自分をありのままに表現していきたい、そしてそれがこのうえなく楽しそう、と思っています。

—保育者など大人のための場作りや、将来的な小学校構想、楽しみです。



写真5 全田和也氏
(写真：日経研月報)